

# 町史

とっておきの話

293

国立科学博物館  
分子生物多様性研究資料センター

吉川 夏彦  
よしかわ なつひこ

## カエルとサンシヨウウオの楽園・ただみ

### 只見町のサンシヨウウオ②

#### — 溪流にすむ仲間 —

只見町には五種のサンシヨウウオ類(有尾類)が生息しています。そのうちの二種、ハコネサンシヨウウオとタダミハコネサンシヨウウオは山地の溪流とその周辺の森林を住処にしています。雪の多い只見町は地下水が豊富で、山林の所々から年間を通して冷たくきれいな湧水が湧き出して流れをつくり、彼らの良好な生息環境となっています。

二種のうちの一つ、ハコネサンシヨウウオは福島県・茨城県以西の本州に広く分布しており、会津地方の山間部でもっとも個体数が多く普通に見られる有尾類です。檜枝岐村や旧館岩村、栃木県の旧栗山村では、かつて初夏の繁殖期に溪流に罾を仕掛けて捕獲し、燻製にしたものを薬用に出荷して現金収入としていました。檜枝岐村では小規模ながら現在も漁が行われ、燻製が生産・販売されています。只見町内ではそういった漁は行われませんが、



▲ハコネサンシヨウウオのオス(黒谷)

いたるところの溪流にハコネサンシヨウウオが生息しており、沢で石をめくるとその下に隠れている幼生(上陸前の子供)を観察することができます。幼生は溪流での生活に適応しており、水の抵抗を減らすためにエラや尾ビレは小さくなり、指先には滑り止めとなる湾曲した黒い爪を持っています。そのため比較的に見分けは簡単です。溪流でサンシヨウウオの幼生を見かけたら指

先をよく見てみてください。

この幼生は二年以上かけて成長し、三年目の秋ごろに変態・上陸して陸上生活に入ります。そのため溪流の中には一年目から三年目まで、大中小のさまざまな大きさの幼生が見られますが、共食いをすることはほとんどありません。池に生息するクロサンシヨウウオの幼生が激しく共食いしながら三〜四ヶ月ほどで上陸してしまうのと比べて、ハコネサンシヨウウオは成長が非常にゆっくりで、性質は穏やかです。干上がってしまう心配がなく、水温が低く安定した溪流という環境に適応したこと、大きさの異なる幼生が一つの沢の中で暮らす生態とが、そのような習性を発達させたのかもかもしれません。陸上生活に入った後、成熟までにはさらに二年以上かかるものと思われませんが、その間のかわしい生態はよくわかっていません。



▲ハコネサンシヨウウオの幼生。背中模様は帯状からまだらまでさまざま。指先に黒い爪が見える(黒谷)

ハコネサンシヨウウオは世界的にみても特殊な産卵生態をもっており、初夏に溪流源流部の地下水脈中に卵囊(卵が入った袋)を産み付けます。そのため卵が地上で見つかることはきわめて珍しく、卵ではなく幼生を直接産むのではなくと考えられていた時期もありません。産卵場所と卵囊は昭和九年(一九三四年)に旧館岩村の枯木山の山中で、新潟医科大学の工藤得安博士によって初めて確認されました。発見の陰には現地のベテラン山椒漁師の協力があつたことも記録されています。しかし

その後現在に至るまで、卵囊が実際に確認された例は全国的にも数えるほどしかありません。町内で一番ふつうにみられるサンシヨウウオなのにもかかわらず、その生態は現在も謎に包まれているのです。

二種のうちのもう一つ、タダミハコネサンシヨウウオは、ハコネサンシヨウウオに近縁な新種として二〇一四年に只見町で発見されました。只見町と新潟県三条市・魚沼市に分布し、町内では只見川周辺より西側で確認されています。外見の特徴や生態はハコネサンシヨウウオにとてもよく似ていますが、産卵期が晩秋から初冬であるという点が大きく異なります。またハコネサンシヨウウオは背中が黄土色の帯状の模様がありますが、タダミハコネサンシヨウウオは模様がほとんどなく全身が黒いという違いもあります。不思議なことに、同じ沢でこれらの二種両方の幼生が見つかっています。DNAを用いた研究では両種は雑種を作ることはまれで、互いの独自性を維持しながら共存していることが確かめられています。